

最後に会計報告を致します。

会計報告 ( 10・8 ~ 11・7 )		単位 円	
収 入		支 出	
奨学金寄付	174,000	現地活動費	452,615
その他寄付金	206,000	印刷費	23,000
リサイクル売却益	84,967	通信費	28,750
衣類送料寄付金	32,000	車両費	17,000
葛城山麓を守る会切	100,000	葛城山麓活動費	2,750
会 費	114,000	来日接待費	136,760
前年度繰越金	7,595	雑 費	39,634
合 計	718,562	合 計	700,509

※ 1 パーツ = 3, 0 円 として計算

#### 現地活動費内訳

奨 学 金	219,000	学用品 (ノート、鉛筆)	16,355
ゴムゾーリ代	15,945	滞 在 費	48,750
交 通 費	54,725	そ の 他	97,840
		差引残高	18,053 円 (次年度に繰り越し)



昼食の様子 (ファイマサン小学校)

# SEP



第 22 号 11・8・8 発 行  
代 表 山 本 宏 文  
奈 良 県 葛 城 市 竹 内 290-2  
TEL & Fax (0745) 48 - 5174

Saiwa Education Program(サイワ教育プログラム) E-mail saiwa-yokiyusan@kcn.jp

## 第 13 回 タイ支援活動

今年も6月7日から16日までの10日間、タイ北部チェンライ県メースオイ郡にあるファイマサン小学校を中心として、奨学金や学用品などの支援活動を実施した。活動内容は、同小学校の子どもたち30名への奨学金支給、300名ほどの全校児童に学用品(ノート、鉛筆)、ゴムゾーリなどの配布。さらには、他の地域で、三名の学生への奨学金支援などであった。なお、今回の参加者は、山本宏文(代表)、山本るみ子の二名でした。以下、その時の模様を紹介し、この活動にご支援・ご協力下さっている皆様方への報告といたします。

## 現 地 ま で

6月6日午後10時30分、近鉄とバスを乗り継ぎ、私たちは関西空港に到着した。夜も遅いからであろうか、あるいは東日本大震災の影響であろうか、思ったより空港は空いていた。お陰で搭乗券の引き換えや税関などもスムーズに通過した。

7日午前0時30分発のTG673便に搭乗。当機はかなり多くの人に乗っており、座席を移って横になれる余裕はなかった。夜も遅いので、飛び立ってじきに消灯、大方の人は眠るための努力をした。

バンコクには現地時間4時20分(時差は2時間なので、日本時間では6時20分)に到着。そこでチェンライ行きの飛行機に乗り換えるため待機した。次は8時15分発なので、約4時間の待ち時間がある。この時間は、まだ免税店も開いていないし、ただひたすらそこで待つしかない。たった一軒、マクドナルドが開いていたが、お腹も空いていないし、ミネラルウォーターを買った。しばらくすると、東の空が白くなってきた。待合所の人の数も多くなり、出発30分前には搭乗手続きが始まった。

チェンライ空港へは、予定通り9時35分に到着。この地はミャンマーに隣接するタイ最北部、地方の空港なので乗降客も少なかった。それであろうか、空港には客待ちのタクシーがない。他の人々は、それぞれ用意していたのか迎えの車で空港を後にされたが、私たちだけが取り残された。見渡してもたった一台のタクシーもない!しばらくすると、空港のガードマンらしき人が声を掛けてくれた。といっても、なにを言っているのかは半分ほども分らないのだが……。お、よその内容は、どこまで行くのか?と尋ねてくれたものと思い、いつも利用するホテルの名刺を差し出した。彼は、自分の携帯電話で何かを話し、私たちにこの場で待つように言っ

ているようだった。しばらくするとホテルの名前が入った車が迎えに来た。それに乗って、町の中心部にあるホテルに荷物をおろし、シャワーのあと、しばらく休憩した。ちなみにこのホテルは1泊500バーツ（1,500円ほど）と手ごろな値段で、近くにはナイトバザールもあり、いろんな店も多くある。なお、タイのホテルの値段は一部屋いくらとなっている。だから二人で泊まれば、一人の金額は半分になる。

午後は、明日に手渡すための学用品（ノート・エンピツ）やゴムゾーリなど300人分を買う予定であった。通訳の人を頼んであったが、急用で来られないと連絡が入った。仕方なく、私ども二人で買い物に行った。あいにく土砂降りの雨、有名なトクトク（三輪自動車、昔のダイハツミゼットのようタクシー）に乗って市場に行く。ゴムゾーリの問屋に入り、身振り手振り注文する。女店主は、私たちの顔を憶えてくれていて、300人分のゴムゾーリはなんとか買うことができた。が、大雨の中、大量のゴムゾーリや学用品を運ぶのはたいへんであった。運転手に言って、ホテルまで運びこみ、ロビーで預かって貰いやれやれだ。

## 奨学生宅へ

その日の午後4時に会う約束をしていた従兄弟、ティダラット（大学3年）とポンサコーン君（高2）。先ほどのトクトクで、彼女らが待つ自宅へと向かったが、途中から家が分からなくなってしまった。行きつ戻りつしながら、1時間ほど遅れてやっと到着する。あまりにも遅いのであろうか、ティダラットさんは自宅の外へ出て待っていた。

彼女には奨学金を1万バーツ、また高校生の彼には3千バーツ、さらに手土産を少々手渡した。二人とも元気そうな笑顔で迎えてくれたところを見ると、大きな問題もなく順調に学生生活を送っている様子だった。ただ、この子たちの祖母も、いつもと変わらぬ元気な笑顔をしていたが、時々足が痛むということである。

このあと私たちは近くの食堂へ行く。件のトクトクに5人が詰め合わせて乗り、雨の中を走った。運転手を交えた6人は、それぞれの好物を注文。久しぶりのタイ料理に私たちは堪能した。いつ来ても、タイ料理は品数も豊富だし、しかも値段は手ごろである。実にありがたいことだと思った。



ティダラットさん（左から二人目）とポンサコーン君（右端）

## 別枠の奨学生

9日午前10時30分から、バンコクの大学で勉学に励んでいるタリカ・タホンさん（3年）への奨学金贈呈をした。場所はOBTといわれる政府関係の建物である。

彼女へ奨学金を渡すようになった経緯は、昨年詳しく紹介したので省きます。奨学金贈呈の様子は、当地の教育委員会からPitchaya氏があいさつ。私どもの活動へのお礼と、これからも長くこの活動して貰いたいとの話であった。次に私から、この活動をするようになった経緯を話し、今後とも

しっかり勉強に励み、この国の発展に寄与して貰いたい、という会員の方々の希望と期待を伝えた。最後にタリカさんから、大学進学をあきらめていた。が、当会からの奨学金をいただき、勉強することができるのは本当に幸せである。あと2年の期間、より一層勉学に頑張るとの決意が述べられた。最後に、日本の皆様に対し、心より感謝していると話していた。

その後、近くにあるタリカさんの実家に行った。急斜面を上った家では父母や姉家族が待っていた。父は57歳で、交通事故のためいま仕事はできない状態。母54歳は元気で、やはりコメやトウモロコシ作りの農業をしている。1時間ほど話をしたのち、別れを告げてホテルに戻る。

今回のタイ支援の活動も、多少のハプニングがあったものの、予定通り順調に進めることが



（奨学金を渡す 一左から三人目がタリカさん）



（OBTでの面談）

出来ました。そして、現地の人々からはたいへん喜ばれました。これもひとえにご支援下さった皆様方に対しのものであります。まだまだ小さい渦ですが、この活動を通じ、タイと日本、いや世界の人々が、お互いに手を取り助け合う一住みやすい世の中の一助になればと願っております。この先も、さらなるご支援・ご協力をお願いし、活動報告といたします。ありがとうございました。



( 奨学生の家 二軒目 )



( Preerawit 君 )

約1時間話をしたのち、二軒目の奨学生宅へ行く。といっても、すぐ隣の家である。奨学生の  
名前は Teerasak Japer 君 (小2)。

彼はサッカー大好き少年で、大きくなったらサッカー選手になりたいとも話していた。祖父母  
(63歳の祖父と60歳の祖母)と三人で暮らしている。父は昨年30歳の若さで亡くなり、母  
は再婚して出て行ってしまった。妹一人いるが、母と共に出て行った。仕事は農業、実際これ  
以外の仕事は何もない。祖父母が細々と続けている状態である。

なお、この辺り一帯は、いろんな山岳民族が混在している。彼らはリソー族と言われる人々  
である。次に、山岳民族について簡単に紹介する。

## 一口メモ

山岳民族は、半遊牧民として国境付近の山地にいた人々(彼らには国境の意識は無かったに  
違いない)や、戦乱や迫害を避けてタイへ避難してきた人々であり、タイの中では最も貧しい  
人々と言われている。夫々独特の言語、宗教、服装、習慣を持っている。元々焼畑農業とケシ  
の栽培で生計を立てていたが、タイ政府による焼畑禁止(森林保護のため)と、麻薬の徹底的  
な撲滅政策とから、従来の生活基盤を捨て、タイへの同化を図らねばならない状況になっている。  
一方、タイの市民権を得て身分証明書を持つ者、難民として認められている者、法律的には不  
法滞在者となってしまふ者など、身分保証的には様々  
のようである。タイへの同化と、それ故に古来からの  
伝統的風習・宗教等の崩壊という面もあり、多くの課  
題があるようだ。

なお、山岳民族には次のような種類がある。モン(メオ)  
族、ヤオ(ミェン)族、ラフ(ムスー)族、アカ族、リス(リ  
ソー)族、カレン(ヤン)族など。各民族ともカラフル  
な色の服装であるが、それぞれ異なった服装である。



( 奨学生の家 )

その日の夕刻、現地ガイドをしてきているアヌチットさんがやっとホテルに来てくれた。  
一年ぶりに会う彼と、その日は遅くまで話が弾んだ。次の日の打ち合わせや、持参する物の点  
検をした。

## フェイマッサン小学校へ

翌8日はファイマサン小学校へ行く日である。ホテルでの朝食ののち、再度持ち物の点検をし、  
8時30分に出発した。ファイマサン村までは、車で約2時間かかる。こちらの道路事情は大  
変すばらしく、チェンマイ郊外までは2車線の広い道がある。その後も広く走りやすい道が続  
いているので、ほとんどの人は100km前後で走っている。日本の高速道路並みのスピードで  
ある。

タイでは、7月3日に国政の総選挙があった。現職のアピシット首相と有力候補のインラッ  
ク氏(タクシン前首相の実妹)、その人たちの顔写真の看板が道路に延々と林立している。看板  
は畳1枚ほどの大きさがあり、それが道路にずっと続いている。少し異様な感じである。

国道から横道に入り約40分、曲がりくねった山道を行くとファイマサン小学校がある。途  
中の景色は、もう山々一色である。いくら見渡しても山以外は何もない。そんな中、途中にポ  
ツンと人家も見える。竹と草で建てられた山岳民族の人の家々である。山の斜面を平らにし、  
数軒から十軒ほどの家が点在している。普段見慣れている景色から隔絶した世界がその辺りに  
は広がっているのだ。その中をひたすら走って10時すぎ、目指す学校が左手に見えてきた。  
校庭にはチェッサダー校長以下、諸先生方、さらには子どもたちのなつかしい姿があった。

## 贈呈式の様子

贈呈式は女の先生の司会で始まり、まず校長先生のあいさつがあった。続いて、代表の山本  
からファイマサン小学校の子供たちに、メッセージとして次のような話をした。



( メッセージを読む )



( 贈呈品と共に ー先生方もー )

フェイマッサン小学校の子どもたちへ贈る言葉（11・6・8）

ファイマサン小学校のみなさん、こんにちは。みんな元気な顔で迎えてくれましたね。今日は、新しく出来たすばらしい建物で会うことが出来ましたね。

もうみんな覚えていると思いますが、私は日本から来た山本で、隣にいるのは私の妻です。今年も、あなた方に奨学金や学用品などを持ってきました。

私は毎年この学校に来ています。それは、あなた達がよりよい環境で勉強できるようになって貰いたい、という日本の人たちがいます。その人たちから奨学金やその他いろんなものを預かって持ってきました。

いま世界の姿を見ると、あちらこちらで争いがあります。大きくは国と国との戦争、小さくは隣近所や兄弟のけんかなど、世界の人たちは毎日争って暮らしています。このような生き方は間違いです。人間は、みんな仲良くたすけ合って暮らさなければなりません。世界の人々が仲良くたすけ合って暮らすならば、この世界はほんとうに住みやすい所となります。それには一人ひとりの心の持ち方が大事です。「争う」という自分の心を変えることによって、この世が変わるのです。

みなさんはまだ小さいので、むづかしいことは分らないでしょう。いまはしっかり勉強やスポーツをし、また親や先生の言うことを聞いて、立派な大人になって下さい。

私達も、また日本人すべてもそれを希望しています。

その後、奨学金を30人の子どもたち一人ひとりに手渡した。続いて、ゴムゾーリや学用品300人分を校長先生に渡し、先生方と奨学生、それと私どもと一緒に記念写真を撮る。

さらに、新しくなった食堂兼講堂を見学する。その鉄骨造りの建物は、かなり天井が高く涼しいだろうと感じた。これなら少々の雨や風にもびくともしない、ひじょうに丈夫な建物である。ちなみに、子どもたちはここで毎日の昼食をとっている。



（ 食堂兼講堂 ）



（ 奨学金を渡す ）



（ 奨学生たち ）



（ 奨学生たち ）

### 奨学生の家へ

学校で昼食をいただいたのち、私たちは奨学生の家を二軒訪ねた。今回訪問した家は、歩いて5分とかからない学校近くの場所にあった。

まず一軒目の家、子どもの名前は Preerawit Yayee 君（小2）である。この辺りの家がほとんどそうであるように、ここもまた竹を組んで床や壁とし、草ぶきの屋根である。これでは大雨の時、水が漏ってくるのではと危惧されるが、その心配はほとんどない。私も何度か大雨に遭遇したことがあったが、家の中に水漏れはなく、いたって快適であった。また竹製の壁や床も、当地のように暑い処では涼しく暮らすことができる。ただし1月前後は寒いとのことであるが。

家は山の傾斜地に立っており、高床式である。下ではニワトリや豚が飼われている。これらのニワトリは親鳥が4,5羽のヒヨコをひきつれている。垣根はなく、余所に行ってしまうのではと尋ねたが、その心配はないらしい。自分の住まいの範囲はちゃんと心得ているようだ。

さて、この奨学生の家族構成は、母親との二人暮らしである。彼は二人兄弟の弟で、兄は昨年16歳で結婚し、ほん近くに住んでいる。ちなみに兄嫁の年齢は13歳とのことである。また父は、どこへ行ってしまったか分からないと話していた。母の仕事は、少しの農業—コメやトウモロコシなど、あと日雇い仕事である。



（ 奨学生の家にて 一軒目 ）